



2016.01.25 **New!**

政策研究

第11回 県民のんき度ランキング

アルファ社会科学株式会社 主席研究員 本川裕

県民性の分かる公式データ

県民性を話題にするデータが氾濫しているが、信頼できるものは少ない。調査設計が科学的でなく、また調査の対象人数も少ないデータを基にあれこれ論じてみても、とらえどころのないむなし結果に終わることが多い。

国勢調査や人口動態統計のような全数調査なら、県別であろうと市町村別であろうと信頼できるデータが得られる。ところが、サンプル調査であると人口数の少ない県ではサンプルも少なくなってしまうので、県別集計まで信頼できるデータを得るためにはかなり大規模なサンプル数の調査が必要となる。これは、市町村民が対象の意識調査でも全域のデータであれば千人ほどのサンプルがあればよいところを、域内の各地区別についての確からしいデータを得ようとする全体で数千人というオーダーのサンプルが必要となるのと同じことである。

表に、県民性の判断に関係がありそうと思われるデータのうち、調査設計が科学的でサンプル数も多く、県別まで集計されている官庁統計等の統計調査等の一覧を掲げた。

全国で5万世帯以上といったサンプル数がないと信頼に足るデータは得られないと考えられていることが分かる。厚生労働省の国民健康・栄養調査（大規模調査）やNHKの全国県民意識調査はサンプル数がやや少ないが、県別に一定数以上のサンプルで調査し、全国集計するときは県別ウエートで戻すというような工夫を行っている。なお、NHK調査は信頼に足る県民性データとして様々な分析、活用されたが、今や古すぎるので新しい調査実施が求められている。

調査主体	調査名	頻度	サンプル数
総務省 統計局	国勢調査	5年ごと	全数
	就業構造基本調査	5年ごと	47万世帯、そこに住む15歳以上世帯員
	社会生活基本調査	5年ごと	8.3万世帯、20万人（10歳以上）
	全国消費実態調査	5年ごと	（2人以上の世帯）5万1,656世帯 （単身世帯）4,696世帯
厚生 労働省	人口動態統計	毎年	全数
	国民生活基礎調査（大規模調査）	3年ごと	（世帯票・健康票）30万世帯、74万人
	国民健康・栄養調査（大規模調査）	随時（最新2012年）	2.4万世帯、6.1万人（1歳以上）
NHK	全国県民意識調査	随時（最新1996年）	各県900人、全国計4万2,300人

表 県民性を示す県別データが得られる主要な統計調査等

この中で、比較的サンプル数が多い抽出調査は、就業構造基本調査（5年ごと）と国民生活基礎調査（3年ごとの大規模調査）であり、世帯総数の1%弱に当たる30万~47万世帯を調査している。

就業構造基本調査は、毎月失業率が発表される労働力調査がサンプル数が少ないため、都道府県別の結果が得られないのに対して、5年ごとに都道府県別までの詳細な就業関係のデータを得るために行われている。国民生活基礎調査の大規模調査も、毎年の簡易調査では得られない詳細かつ地域別データを得るために3年ごとに行われている。

国民生活基礎調査の大規模調査は、このように、都道府県別の比較的信頼できる情報を得られる調査であるのに、意外とその結果は活用されていないようである。ここでは、その一例として県民のんき度ランキングのデータを紹介する。

どの県民がのんきな性格を有しているか

国民生活基礎調査は、3年ごとの健康票による調査で、国民や県民の健康状態やどんな傷病で通院しているかを調べているが、こころの健康状態についてもK6という尺度を用いた設問で調査している。

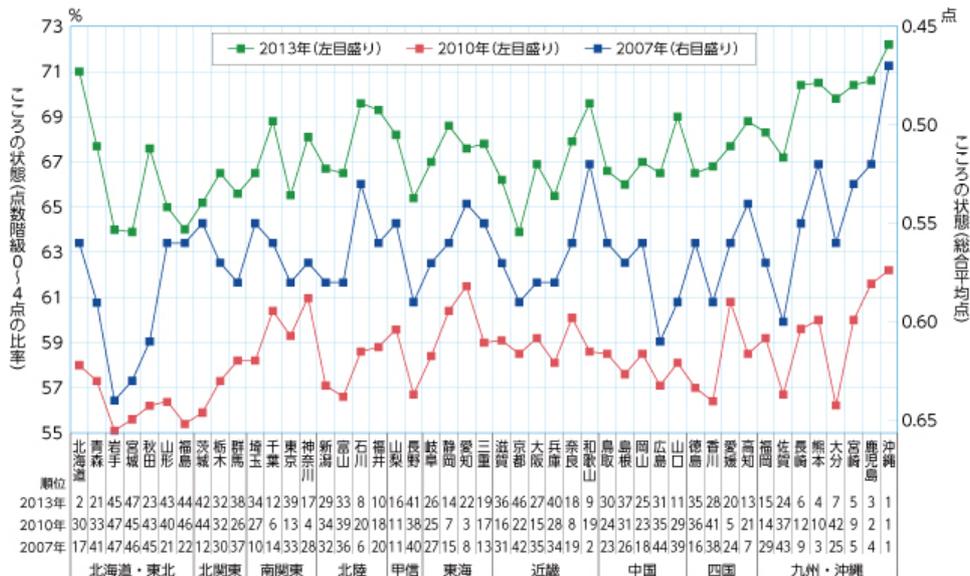
図は、この設問の回答結果を、3年次分、県別にグラフにしたものである。図の(注)に記したように、設問の回答は精神的な問題が少ないほど点数が少ない結果となる。ここでは、全体の点数が少ない人の割合、あるいは総合平均点の低さを県別に示した。精神的な問題が少ないほど、こころが平安あるいは健全ということであるが、これを「のんき度」としたのは、厚生労働省の見方ではなく、筆者によるオリジナルな評価である。しかし、この評価は常識から乖離(かいり)してはいないと考えられる。

もちろん、各年の結果には、調査時点までにそれぞれの県民を襲った経済状態の変化や災害など外部的要因の影響も反映されていると考えられるので、県民性の判断には数年次の結果で共通した傾向を読み取らねばならない。

図を見て誰でも気がつくと思うが、のんき度は西高東低の地域構造を持っているといえる。傾向として、東北が最も低いレベルにあり、九州・沖縄が高いレベルにある。特に、沖縄は3年次全てで全国トップののんき度である点が目立っている。地球規模でも日本でも北国気質と南国気質の対比が語られることが多いが、そのとおりのデータになっているといえる。

細かく見ていくと、同じ北方圏に属すとはいえ、北海道は東北と比べるとのんき度が高く、2013年には全国第2位となっているぐらいである。必ずしも気候風土だけが県民性の要因ではないことが分かる。

東北地方の中では2013年に岩手、宮城、福島が全国の中でも最低水準のレベルとなっているので、この年次だけ見ると東日本大震災の影響かとも思われるが、のんき度の値は全体に2010年から上昇しており、2007年、2010年にも岩手と宮城は東北の中ばかりでなく全国の中で最低レベル、福島も2010年にはやはり低いレベルだったので、外的要因というより、むしろもとの県民性の反映といえそうである。



(注) 原資料の集計方法に応じ、2007年は6設問の平均点の平均、2010年以降は6設問の点数合計0～4点の割合をグラフにした。したがって、各年の県間比較及び各県の2010年と2013年の比較はできるが、各県の2007年と2010年以降との比較はできない。

こころの状態(国民生活基礎調査の「用語の解説」から)

こころの状態には、K6という尺度を用いている。K6は米国のKesslerらによって、うつ病・不安障害などの精神疾患をスクリーニングすることを目的として開発され、一般住民を対象とした調査で心理的ストレスを含む何らかの精神的な問題の程度を表す指標として広く利用されている。「神経過敏に感じましたか」「絶望的だと感じましたか」「それぞれ、落ち着かなく感じましたか」「気分が沈み込んで、何が起こっても気が晴れないように感じましたか」「何をしても骨折れだと感じましたか」「自分は価値のない人間だと感じましたか」の6つの質問について5段階(「まったくない」(0点)、「少しだけ」(1点)、「ときどき」(2点)、「たいてい」(3点)、「いつも」(4点))で点数化する。合計点数が高いほど、精神的な問題がより重い可能性があると考えられている。

出典：厚生労働省「国民生活基礎調査」

図 県民ののんき度ランキング

関東地方では、茨城や群馬、埼玉は水準が各年次で一定していないが、それ以外では、千葉と神奈川が高く東京が低いという傾向が認められる。臨海県のゆとりと首都の気ぜわしさとの対比だとも感じられる。

北陸・甲信地方では、新潟、富山と長野で低く、それ以外で高いという傾向が認められる。富山と石川では、隣県であり県民性が似ていると思われるがちであるが、のんき度では富山が低く、石川が高いという対照的な県民性となっている。長野県民は物事を難しく考える傾向がありそうだ。

全体にのんき度が高い九州地方の中では佐賀県民だけは一貫してのんき度が低いようだ。大分県民は2007年、2010年のはのんき度が低かったが、2013年には隣県とそれほど変わらない水準となっている。

だから何なんだといってしまうればそれまでであるが、なかなか興味深いデータだと思われる。



この記事の著者

本川裕

アルファ社会科学株式会社 主席研究員

アルファ社会科学(株) 主席研究員。あらゆるジャンルの統計データをユニークな視点でグラフィック化した人気サイト「社会実情データ図録」(http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/index.html)を主宰。2004年のスタートから、毎週2件のデータ更新を行い、現在1,200件を超える統計グラフと解説は、1日1万件以上のアクセスがある。東京大学農学部農業経済学科卒、(財)国民経済研究協会常務理事研究部部長を経て現職。立教大学兼任講師。1951年神奈川県生まれ。著書『統計データはおもしろい!—相関図でわかる経済・文化・世相・社会情勢のウラ側—』(技術評論社、2010年)、『統計データはためになる!—棒グラフから世界と社会の実像に迫る—』(技術評論社、2012年)、『統計データが語る日本人の大きな誤解(日経プレミアシリーズ223)』(日本経済新聞出版社、2013年)。

